

救出作戦再評価の機運 ペルー公邸人質事件20年



リマの陸軍施設で救出訓練に使われた日本大使公邸の原寸大レプリカ内に立つセサル・バルキ大佐（右）と元特殊部隊幹部

17日（共同）

作戦当日、ゲリラ側の応戦は激しかったが、終了後「1人を除いて人質は全員無事だ」と知らされ感激したことを覚えて

人権侵害事件で禁錮25年の刑に服していること、作戦の成果に影を落としてきた。しかし事件を機にMRTAは壊滅。フジモリ政権下で他の左翼ゲリラも

「死を意識」後遺症今も



小倉 英敬 さん

窓外に見えた。

「武力突入では通常、多くの死者が出る。もうだめだと思った。小倉さんは死を意識した。特殊部隊員が2階の部屋に躍り込み、高さ11・25メートルの辺りを銃で掃射。床に伏せ、毛布をかぶるなどして事態が収まるのを待った。

ペルーの日本大使公邸を左翼ゲリラ、トゥパク・アマル革命運動(MRTA)のメンバーが占拠し、日本人らを入質に取った事件が軍特殊部隊の強行突入で解決して22日で20年。ゲリラを超法規的に処刑したとの疑惑に根強い批判がある一方、少ない犠牲にとどめた「世界で最も成功した人質救出作戦」を再評価する機運も出ている。

「部屋に戻れ」。1997年4月22日午後。いつものように体を動かそうと階段を上り下りしていた人質の日本人を、同じ人質のペルーの警察関係者が制止した。2階にいた大使館員(当時)の小倉英敬さん(66)がおかしいと感じて程なく、爆発音がとどろき、敷地内になだれ込む軍特殊部隊の姿が

「超法規的処刑」疑惑に批判

「超法規的に処刑」されたとは認定した。当時、作戦を指揮したフジモリ大統領(78)は00年に失脚した。在任時の

在も起きている」と警鐘を鳴らす。